The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	三島由紀夫『仮面の告白』とスタンダール『アルマンス』 : 性的不能と同性愛の交錯を中心に
Author(s)	朴, 秀浄
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2020, 54, p. 81-101
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91380
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

三島由紀夫『仮面の告白』とスタンダール『アルマンス』

――性的不能と同性愛の交錯を中心に――

朴　秀浄

キーワード：三島由紀夫／スタンダール／性的不能／同性愛／性科学

はじめに

若き作家・三島由紀夫（1925 ～ 1970 年）の存在を世に知らしめた書下ろし小説『仮面の告白』（河出書房、1949 年）は、三島自ら「この小説は、私の「ヰタ・セクスアリス」であり、能ふかぎり正確さを期した性的自伝である[1)]」と記したことから、その「自伝」的な要素の検討に研究の焦点が当てられてきた。しかし、中村佑衣による近年の研究では、『仮面の告白』の主人公「私」が語る性の告白は、西洋において近代的な自我を成立させた「告白の制度」によって「アブノーマル」なものとして形作られたことが指摘されている。[2)] 実際に『仮面の告白』はその思想的な性の知識において、19 世紀の欧州にて勃興し、20 世紀初頭の日本に移植された性科学の延長線上にあり、三島は、当事者によるセクシュアリティを告白する行為を利用して個人の人格・アイデンティティを「正常／異常」と分類する性科学の手法を採り入れ、「私」の告白を創り出した。[3)]

一方で本稿が注目したいのは、「私」という近代的な同性愛者の人物造型に影響を及ぼした先行作品である。フランスの作家・スタンダール（1783 ～ 1842 年）の小説『アルマンス』（1827 年）は、欧州にて個人のアイデンティティを決定づける要素として性の告白が注目を浴びつつあった時期に生み出された作品であり、『仮面の告白』と時代こそ違え、似たような社会的

背景を持つ。また、ここに書かれている主人公・オクターヴの「宿命」的な秘密、すなわち性的不能は、『仮面の告白』の「私」へ受け継がれたと考えられる。本稿では、『仮面の告白』の同性愛者像の参考モデルとしての『アルマンス』のオクターヴに注目しながら、『仮面の告白』が日本において性的不能と同性愛を絡み付けた先駆的な小説であることを論じる。

1. 三島由紀夫における『アルマンス』の受容

スタンダール作『アルマンス』は、「1827年のパリのあるサロンの情景」という副題が示すとおり、ナポレオン戦争後の王政復古期という同時代のフランス社会を時代背景としている。作中では、主人公のマリヴェル・オクターヴの眼を通して、首都パリのサロンに集う貴族階級・上流階級の実態が批判的に捉えられている。オクターヴは、誰にも言えない秘密を抱えており、その秘密ゆえに人間関係に苦しむ。彼の秘密は、長い間この小説の重要なテーマとして研究されてきた。[4)] というのは、スタンダールによると、オクターヴの秘密は性的不能であるものの、問題は、彼の秘密が性的不能であることを示す明確な言葉が、作中に一言も現れないからである。

スタンダールは『アルマンス』の発表前に、親友のプロスペル・メリメ宛に次のような手紙（1826年12月23日付）を書いている。

> J'aipris le nom d'Olivier, sans y songer, à cause du défi. J'ytiens parce que ce nom seul fait exposition et exposition non indécente. Si je mettais *Edmond* ou *Paul*, beaucoup de gens ne devineraient pas le fait de *babilanisme*.[5)] （拙訳：オリヴィエという名前を付けました。意図していませんでしたが、挑戦のためです。それは、私にとっては重要であり、その名前だけが下品でなく指示できるからです。もしエドモンドとかポールにすると、多くの人々はバビラニスムの事実を推測できないでしょう。）

スタンダールにとって「オリヴィエ」という名前は、主人公のバビラニスム、[6] つまり性的不能を読者に察知させる重要なヒントであったに違いない。事実、『アルマンス』が書かれる直前に、性的不能者を主人公とする二つの『オリヴィエ』が発表され、パリのサロンを中心に人気を博した。[7] 当時のパリにおいて、性的不能者の物語として『オリヴィエ』という題名の小説が流行していた経緯から、スタンダールは「オリヴィエ」という名前が、主人公の性的不能を暗示する役割を果たせると考え、自作に用いようとしたのではないかと推測される。

しかしながら、スタンダールが最初に何を意図したにせよ、小説の題目は「オリヴィエ」ではなく「アルマンス」に決まった。ただし、先に引用したメリメ宛の手紙の存在は、『アルマンス』の読者と研究者にとって、オクターヴの秘密を性的不能に特定する決定的な証拠となり、広く受け止められてきた。[8] スタンダールの手紙に触発され、オクターヴを性的不能者と見なした一人にアンドレ・ジードがおり、三島は、このジードによる『アルマンス』の書評を参照しながら、ジードと同様にオクターヴの性的不能に注目した。

『アルマンス』が公刊されてからおよそ百年近く経った 1925 年に、チャンピオン社はジードの序文を付した『アルマンス』を出した。この序文の中でジードは、スタンダールがメリメに宛てた手紙が『アルマンス』の謎を解く鍵だと言及しつつ、「恋する主人公は不能者なのである。不能者、彼の素振り、行動にはそれと察し（ママ）られるところがある。しかし疑へば疑へる、小説が巧みにこの秘密を蔽ひ隠すやうに出来てゐるからだ[9]」と断言している。ジードは、「オクターヴの不能は決してはつきりと示されることなく、絶えず言外ににほはせられるばかり[10]」だと言い、オクターヴのあらゆるキャラクター性から性的不能を特記しているが、このような確信は、スタンダールの手紙をそのまま信用した結果であろう。[11]

さらにジードは、オクターヴの性的不能に関して、「スタンダールは最も激烈な恋愛とは、最も深刻な障害に抗する恋愛であることを示さふとしたの

であるらしい。（中略）その障害たるや外部からのものでもなく道徳的なものでもない、障害は体質そのもののうちにあるのだ[12)]」と書き、『アルマンス』においてオクターヴの恋愛感情を増大させる要因、つまり障害を性的不能という体質に求めている。性的不能が、内部から生じる生理的な問題である以上、それは意志と努力では克服できないものであるから、恋愛感情はかえって盛り上がる、というのがジードの解釈である。

このようなジードの分析は、『アルマンス』に対する三島の理解に大きな影響を与えた。三島は 1958 年に発表した『アルマンス』の書評に次のようなことを書いている。

> 小説の興味の中心は、作中一言も言及されないでゐてしかも最も重大な「不能」のモチーフである。そして古典的な心理小説の均整と典雅のうちにオクターヴの悲劇が語られ、ジイドのいふやうに、恋愛の情熱が障碍の増大によつて増加するものであれば、「不能」といふこの絶対的な障碍によつて、情熱恋愛のもつとも典型的な例が語られたのであるが、その語られ方は明澄で、抽象的で、「パルムの僧院」や「赤と黒」のやうな行動と冒険から絶縁されてゐる。それもその筈、主人公は「不能」だから、恋人の前から逃げ出すほかはなく、あらゆる行動と冒険は不可能なのである。（下線はすべて筆者に拠る）[13)]

三島は『アルマンス』の作中に、オクターヴの性的不能を指す言葉が登場しないことを知っているにも関わらず、「不能」を『アルマンス』の最も重大なモチーフと評価している。ここからは、ジードが書いた序文が三島の『アルマンス』理解に多大な影響を及ぼしていることが見て取れる。

三島がオクターヴの不能を「絶対的な障碍」と呼んだのは、ジードが言うようにそれが「体質」、つまり生理的なものであるために、人の意志による「行動と冒険」を「不可能」にするからである。したがって三島は、この書評においてオクターヴを「不可能の英雄[14)]」と名付けている。三島は引き

続き、「「アルマンス」には、宿命と主人公の対置において、自由意志がはじめから不可能に当面して[15)]」いると書き、オクターヴの恋愛を妨害する「絶対的な障碍」を「宿命」という言葉に置き換えている。この書評は、『仮面の告白』発表の9後年に書かれたものではあるが、性的不能を「宿命」と捉える三島の理解は、『仮面の告白』においても同じく展開される。

同性に性的に魅了される「私」は、そのような「異常」ではなく、「正常」な男性になりたがっており、園子を対象に「正常」な男性の恋愛を模倣するが、彼女との肉体接触や接吻に何の快感もなかったことから、結婚を避ける。同じく『アルマンス』も、主人公・オクターヴと恋人のアルマンスとの恋愛を描いており、オクターヴは誰にも言えない秘密のために、アルマンスとの結婚を回避する。オクターヴは結婚が決まってから、アルマンスにこの秘密を打ち明ける決心をするが、実行されない。つまり両作品は、相手に明かすことのできない秘密、つまり性的不能が原因で結婚を避ける男性の恋愛物語となっている点から、オクターヴの性的不能・「宿命」が、『仮面の告白』の主人公「私」の性的指向を「先天的」・「生まれつき」のものに位置付けるための一つのヒントになったと考えられる。何より三島は、『仮面の告白』の刊行に先立ち、その広告のために書いた「作者の言葉」(『近代文学』1949年4月号掲載)において、この小説の「後半は世にも不思議な「アルマンス」的恋愛(「アルマンス」より更に不可思議)の告白とその永い熱烈な悔恨の叙述に宛てられる[16)]」と述べ、『アルマンス』に直接言及している。三島の蔵書目録を公開している『定本三島由紀夫書誌』(薔薇十字社、1972年)によれば、三島は前川堅市訳『アルマンス』(河出書房、1948年)を所蔵していたが、これは正しく『仮面の告白』の執筆時期に刊行されただけに、『仮面の告白』への影響は想像に難しくない。

ここで、三島とスタンダールの比較研究の状況を確認したい。三島とスタンダールの比較研究は数少なく、栗須公正の先行研究以外はほとんど見当たらない。[17)]『仮面の告白』をはじめ、『春の雪』(『新潮』1965年9月号から1967年1月号まで連載)と『奔馬』(『新潮』1967年2月号から1968年8月

号まで連載）などに見られるスタンダールの影響を論じている栗須の研究は、先駆的なものとして注目に値する。栗須は、1949年9月、大岡昇平が雑誌『批評』第63号に寄せた「『アルマンス』の問題」と三島の『アルマンス』書評を読み比べ、三島は『アルマンス』の中の「宿命」をとりわけ強調していたと述べている。[18] 確かに大岡が書いた『アルマンス』の評論では、オクターヴの性的不能は「宿命」と表現されていない。三島は、オクターヴの恋愛を妨害する性的不能を「絶対的な障碍」と呼び、オクターヴが恋人から逃げる理由を彼の内なる問題に求めた。一方で大岡は、オクターヴが自身の秘密をアルマンスに告白できなかった原因を、二人の仲を嫉妬したスービラーヌの陰謀のような外部に探した。[19] ところが、栗須は、三島がこれほど力点を置いた「宿命」を『豊饒の海』四部作における輪廻転生のモチーフに関連付けており、『仮面の告白』の宿命観との類似点は見出していない。しかし、『アルマンス』における「宿命」と『仮面の告白』の宿命観の類似に注目すれば、三島が『仮面の告白』の創作に当たって考慮した主人公の特質はより明確になるはずである。

2.「私」と「オクターヴ」の中に宿っているもの

まず、『アルマンス』のオクターヴは、理工科学校を卒業してから砲兵隊に入る計画を立てたり、部屋に閉じこもって誰にも会わず18世紀の哲学者の書物を耽読したりするなど、現実の生活に興味を持たない人間嫌いな性格の持ち主である。20歳でまだ結婚をしていないオクターヴの才能と美貌は、サロンの貴族たちが彼を特別に扱う理由であり、オクターヴはそのようなサロンの人たちの態度を軽蔑する。フランス革命時に貴族が失った財産に対する賠償法が決まり、オクターヴの家に2百万フランの賠償金が入るという噂が伝わると、サロンの人たちはオクターヴに一層関心を示し、彼は「あんなもの（注・賠償法）は否決されゝばいい、（中略）そのおかげで、結婚を強ひられるからです。僕は、不幸にも異常な性格で、そんな風には生まれてゐ

ないんです」（前川堅市訳『アルマンス』、河出書房、1948 年、15 頁）と母のマリヴェル夫人に言う。

このようにオクターヴが何よりも避けたがるのは結婚であるが、ボニヴェ侯爵夫人邸のサロンでアルマンス・ド・ゾヒロフに出会った時に、オクターヴは彼女に心を奪われる。愛の予感はオクターヴにとって「不幸」（30 頁）であり、彼女を愛することは、自分を苦しめる「運命」（31 頁）に逆らうことであるため、オクターヴはアルマンスとの結婚をためらう。なぜなら、オクターヴは誰かを愛することを「生命がけで禁じてゐた」（162 頁）からだ。恋する人から逃げ出すように命じる「運命」、すなわちオクターヴの抱えている秘密とは、先述したように『アルマンス』本文中に明確に書かれることはない。しかし作中では、オクターヴはこの秘密を他の誰でもなくアルマンスに打ち明けることを望んでいる。

ところが、このように「運命」たる秘密のために恋人から逃げざるを得ないオクターヴの状況は、『仮面の告白』の主人公「私」にも同じく表れている。「私」の祖母は、生まれて 49 日目の「私」を母から奪い取って自身の病室に閉め切って育てた。「私」の周囲には、病める祖母や看護婦、女中しかおらず、「私」は同じ年頃の友達を持たずに成長した。「私」は、坂を下りてくる糞尿汲取人の下半身や白馬に跨って剣をかざしているジャンヌ・ダルクの絵、門前を通る兵士たちの汗の匂いに官能的な欲求を感じるようになり、このような「異形の幻影」は「実に巧まれた完全さを以て最初から私の前に立つたのだ」（『決定版三島由紀夫全集』第 1 巻、新潮社、2000 年、185 頁）。言い換えれば、「私」の異質かつ特異な性的嗜好は、「私」が選んだものではなく、「私」の内部に存在していたものであり、オクターヴが結婚を断る自身の「異常な性格」を「そんな風には生まれてゐないんです」、つまり結婚できるようには生まれていないと説明しているのと同様に、「私」も「最初」から「異形」として生まれたのである。

「私」は、父の外国土産の画集をめくり、グイド・レーニの描いた聖セバスチャンの殉教図を見つけ、その絵を前にはじめての自慰を体験し、その

後、自慰の「悪習」を続ける。「私」は「性の研究書」を参照し、自分の年齢の男の子たちはこの時期から手淫に熱中することを知り、自分も「その点で彼らと全く同じであつた！」（254 頁）と安堵する。しかし、「私」の「悪習」の対象が聖セバスチャンのように自分と同じ性別の男性であるのに対して、「彼ら」は異性の女性を対象とする相違に気づき、不安を感じる。

そんな中で、友人の草野の家で草野の妹・園子が弾くピアノの音を聞いた「私」は、それを「宿命的なもの」（269 頁）と受け止める。園子の存在は、「彼ら」のように「自分を正常な人間だと装ふ」（286 頁）機会であったが、彼女との接吻に何の快感もなかったことがきっかけに、「私」は自身が「正常」な「彼ら」とは異なることを悟り、草野の家から結婚の申込みが来た時に、曖昧な返事で断る。その後、園子が他の男性と結婚したと聞いた「私」は、「彼女が私を捨てたのではなく、私が彼女を捨てた当然の結果だと自負した。宿命が私に強ひるところを、私自身の意志の、また理性の勝利だと附会する永年の悪癖が、一種きちがひじみた尊大さに達してゐた」（336 頁）と思う。「私」は最初、この成り行きを自分が園子を捨てた「意志」の結果だと淡々と評価しているが、その次の記述を見れば、それは結局、「意志」ではない「宿命」が強いた結果であるのが分かる。

三島は、『アルマンス』におけるオクターヴの行動を、「「不能」だから、恋人の前から逃げ出すほかはなく、あらゆる行動と冒険は不可能」だと解釈した。オクターヴと同様に、「私」の「意志」と「理性」は性的不能の「宿命」に敗北し、「私」には園子との結婚を避けるしか仕方がなかったと理解できよう。このような性的不能の秘密、「宿命」に連なるオクターヴのキャラクター性は、「私」という同性愛者の人物造型に少なからず参考になったのではないかと考えられる。オクターヴと「私」は、自分が他人と異なる存在であることを自覚しているため、悲しみと孤独を感じており、この他人と異なるという意識は、彼らが持っている誰にも告白できない秘密に起因する。

『アルマンス』では、オクターヴが彼自身のことを「僕はたゞひとりで、

この地上に孤立してゐる」（40 頁）と捉えるように、オクターヴは社交界の中で自分の居場所も、考えを共有できる友達も持っていない。また、周りの人々は、彼を「人間ばなれ」（18 頁）した、「風変わり」（35 頁）な人物と思っており、息子を心配したマリヴェル夫人は、彼を医者に診療してもらうが、医者は「この偏執狂は、全く精神的なもので、（中略）決して生理的な原因からくるものではなく、何か異様な観念の結果であらう」（38 頁）という診断を下す。これらの言葉は、彼を世間並の他人と区別する役割を果たしている。そして『仮面の告白』では、「私」が自身のことを「異形」「異常」と評価することで他人と明確に異なる点を際立たせている他に、「私」が母の着物を着て松旭斎天勝の真似をした時を回想する場面では、「私は母の顔を見た。母はこころもち青ざめて、放心したやうに坐つてゐた。そして私と目が合ふと、その目がずつと伏せられた」（188 頁）と書かれ、「私」の嗜好が他人に受け止められないものであることが、他人の目線を描写することで示唆されている。

続いて、オクターヴと「私」を孤立させる彼らの隠された秘密が、作中、いかに語られているか見てゆく。まず、オクターヴは、アルマンスに秘密を打ち明けようと試みるが、その秘密の内容を語ることはできず、ただ自分が秘密を持っているという事実のみを発信する。

> オクターヴは、恐怖におびえきつたやうに、まつすぐ彼女の前に立ちはだかつたまゝ、敢えてその先きをつゞけようとはしなかつた。彼のおびえた眼は、まるで眼の前に怪物の幻でもゐるかのやうに、ぢつと見つめてゐた。（中略）「僕は、君を心から愛してゐる。君は、僕の恋を疑ふことはない。しかし、君を愛してゐる人間は、どういふ人間だらう？それは、一個の怪物なんだ。」（279～280 頁）

オクターヴがアルマンスの眼に映った自分を「怪物」と認識するのは、自分が他人とは異質な存在であることを認めているためである。この異質さは、

自身の秘密を打ち明けようとする場面で言及されるだけあって、オクターヴが持っている秘密と結びついていることが明確である。

同様に『仮面の告白』の「私」もまた、自分のことを「人間ではない」と定める。

> 以前の私なら、転瞬も忘れぬ例の演技で、他の青年と同じやうに、自分の欲望から身をそむける練習を真似て、咄嗟にそこから目を外らしただらうと思はれる。しかし私はあの日以来、以前の私とは変つてゐた。私はいささかの羞恥もなく、―つまり生来的な羞恥がないといふことについての羞恥がいささかもなく―、じつと物質を見るやうにその白い太腿を見詰めた。俄かに私に、凝視から来る収斂された苦しみが訪れた。苦しみはかう告げるのである。『お前は人間ではないのだ。お前は人交はりのならない身だ。お前は人間ならぬ何か奇妙に悲しい生物だ。』（343頁）

「私」は、友人に誘われて娼家に行くと決めてから、裸婦の写真を見つめて欲望を試す「秘密な練習」をはじめる。というのは、「私」は自分の年齢に達した他の青年と違って、女性に欲望を感じたことがないにも関わらず、自分が彼らと「同じである」ように望んでいたからだ。しかし、「私」はこれまで否定してきた事実、つまり「不可能が確定」した後、自己を「他の青年」とは異なる「人間ではない」「人交はりのならない身」「人間ならぬ何か奇妙に悲しい生物」と呼ぶようになる。オクターヴが彼の秘密のために、自己を「怪物」として受け止めるのと同じく、「私」も自分の性的不能を確認してから、自己を「人間ならぬ」物と定義するのである。

事実、聖セバスチャンの殉教図を見て射精する場面に示唆されるように、正確に言えば「私」は「性的不能」ではなく、女性に性的興奮を感じない「同性愛者」であるはずだが、『仮面の告白』では性的不能と同性愛指向が混在している。[20] そして興味深いことに、『アルマンス』の研究史を辿ると、性的不能と見なされてきたオクターヴの秘密が、実は同性愛ではないかという

論考が見受けられる。とりわけ1990年代に入ってからクィア理論の台頭とともに、オクターヴを同性愛者と見なす見解が増えてきた。たとえばスタンダール研究者のドミニク・フェルナンデスによれば、召使いを窓から放り出すようなオクターヴの犯罪的な行為は、オクターヴによる自身の同性愛に対する暴力的な拒否である。[21] フェルナンデスは、ハーマン・メルヴィルの遺作『ビリー・バッド』（1924年）に登場する伍長のクラガートとオクターヴを比べ、クラガートが無垢で美しい水兵のビリー・バッドを誣告したのは、バッドに惹かれていないことを証明するためであり、オクターヴもクラガートと同じく、男性に魅了されていることを否定するために、男性へ暴力を加えるのだと主張している。[22] フェルナンデスの議論には不明瞭な部分も多々あるが、この論考の中に言及されるキュスティーヌ・スキャンダルに注目したい。

『アルマンス』が書かれる数年前の1824年10月28日の夜、フランスの外交官で旅行記作家のキュスティーヌ侯爵（アストルフ＝ルイ＝レオノール）は、パリ郊外で、泥の中で意識不明の状態になって発見された。身体には誰かに攻撃された痕跡が見えていたが、その攻撃の理由は明らかになっていなかった。それにも関わらず、同性愛者のキュスティーヌが通りすがりの兵士たちに性的交渉を持ち掛けたことが原因で暴行されたという噂がパリの社交界・サロンを中心に広まった。フェルナンデスは、キュスティーヌとオクターヴが、二人とも結婚を避けたことや性的不能が疑われた点、そして予想のつかない振る舞いをしたという共通点を挙げつつ、オクターヴはキュスティーヌと同様に同性愛者であると指摘している。[23] 実際、『アルマンス』の副題は「1827年のパリのあるサロンの情景」となっており、『アルマンス』は同時代のサロンの世態を風刺するために書かれただけに、スタンダールはキュスティーヌ・スキャンダルから着想を得て、他人が密かに隠しているもの、つまり性的な事柄が噂の的になる世相を批判していると解釈することも可能であろう。

また、『アルマンス』が書かれた19世紀の欧州では、性的不能と同性愛が

しばしば同一視されたという性科学の歴史を看過してはならない。アンガス・マクラレンの調査によれば、この時代の医師たちは男性の中には「女性化」する者が存在し、過度に「女性化」した結果、性的不能に陥ると考えていた。[24] James Richard Smyth が 1841 年に医学雑誌 *Lancet* に発表した論文 “Impotence and Sterility”において、性的不能者の身体は、女性のそれに近いと書いたことは、その典型であるとマクラレンは指摘している。[25] そのため、オクターヴの秘密を同性愛と見なす見解は、研究の領域では、最近のクィア理論に負うところが多いものの、性的不能者の性質を「女性化」した男性、すなわち同性愛者の性質へ結びつけた時代にあっては、当たり前のものとして読者に了解された可能性さえある。

ところが、これまで見てきたように、オクターヴの秘密をスタンダールが言ったとおり、そのまま性的不能と受け止めるジードのような場合もあれば、フェルナンデスのように同性愛と読み取る論考もある。いずれにせよ、本稿が重視するのは、オクターヴの秘密は何かということではなく、多くの研究がオクターヴの秘密に関して様々な見解を示す根本的な理由である。それは、単に作中にオクターヴの秘密を表す決定的な言葉が出てこないためではなく、オクターヴという人物が、究極的に「他者」そのものを表象するからであると考えられる。アンドリュー・J・カウンターは、フェルナンデスの論考を参照しつつも、結婚を含めたオクターヴの性的行動の全般が容赦なく周りの評価の対象となることから見て、オクターヴの秘密は、同性愛でも性的不能でもなく、「セクシュアリティ」それ自体であると論じている。[26] このようなカウンターの議論をより拡張すれば、オクターヴを「他者」という概念の総体として解釈できよう。

オクターヴは、彼が社交界に参加して自分と同じ年頃の青年たちを見る度に感じる心境を、「僕は、自分の考へを心からうち明けられる人を一人ももたず、これからも、決してもたないだらう」（40 頁）という風に語る。また、スービラーヌが書いた偽の手紙を読んで、アルマンスが自分を愛していないと錯覚し、自殺を決心した時は、「あゝ！あんなくだらない科学などにこら

ずに、うまく社交界にもてはやされる方法を学ぶべきだつたんだ！（中略）愛想の好い人間が、はたちの若い娘の気をひかうとする時には、どういふ印象をあたへるものか、その正確な観念を、経験なり社交界の出来事なりから学ぶべきだつた」（300～301頁）と嘆く。このようにオクターヴは、彼の悩みを他人に共有できず、孤立している。つまり、オクターヴが持っている秘密の中身より重要なのは、彼が自身の属しているコミュニティとつながりを持たない点である。

同性愛者の孤独を描いている『仮面の告白』を創作した際に、三島が主人公の性質の一つとして参照した『アルマンス』におけるオクターヴの秘密・性的不能は、このように同性愛とも解釈できるが、三島はオクターヴを同性愛者と見なしたとは考えられない点で、この影響関係はさらに興味深くなる。これは、性的不能と同性愛が「他者性」という大きな枠組みの中でベン図のように交わっているためであり、だからこそ、これまで見てきたように性的不能と同性愛は練り合わせられてきたのであろう。

3. 性的不能と同性愛をめぐる言説

ここでもう一つ押さえておくべきは、『アルマンス』が発表された19世紀初・中期の欧州においてそうであったように、『仮面の告白』が刊行された20世紀初・中期の日本でも、性的不能と同性愛を一緒くたにする時代の知が存在していた点である。

雑誌『変態心理』1923年4月号掲載の記事「陰萎」では、「性欲の倒錯せる者は、正規の性交を行ふことが出来ないから、（中略）同性愛の者なれば同性に接触することにより、（中略）始めて性欲が興奮し勃起を来すものである。故に此の如き性欲倒錯者は異性と同衾しても、その変態行為を実行し、或は之を脳裡り想像するに非ずんば性交を行ふことが出来ない者もあり、或は全然性交を嫌悪し、変態行為のみによつて性欲を満足する者もある[27)]」とあるように、同性愛者が異性に向かって性的に興奮し勃起しない

ことを、「陰萎」の例の一つとして見なしている。また、西洋の性科学を日本に紹介した性欲学者の羽太鋭治や澤田順次郎が共著した『変態性欲論』（春陽堂、1915 年）では、「自瀆的遂情の妄行より、異性に對する色情を消滅して、陰萎となり、又は神脛衰弱となりたるものなるが如く、啻だに顚倒性慾のみならず、其の他の倒錯症に罹かれる、神経障礙に於いても、亦その原因をなして、後天的色情の異常は、多く自瀆的遂情にあることを、忘るべからず[28)]」とある。ここから、手淫・同性愛・性的不能、すなわち当時「正常」を脱した「異常」と判断され、性的に「他者」化された人々の持つ特性を互いの原因であり結果とする、ねじれた時代の知が確認できる。こういう時代的な文脈があったからこそ、『仮面の告白』は同性愛者の性的不能を描き出すことができたのであろう。

そして、三島が理解したオクターヴの性的不能は、彼の恋愛を妨害する「絶対的な障碍」「宿命」であり、「生まれつき」の同性愛者として「私」を形作る三島にとって、その天から与えられた性的指向に付随する孤独を際立たせるヒントになったに違いない。三島は「私」にオクターヴのような宿命、すなわち女性に対する性的不能の性質を付与することで、「私」を「正常」な男性とつながりを持たない「他者」、「異常者」として位置付けられたのだが、このようなつながりを渇望する性的他者としての同性愛者を造型したことに、『仮面の告白』の意義がある。

というのは、『仮面の告白』以前に書かれた、主人公の性的な「異常」の告白をテーマとする作品を見てみれば、『仮面の告白』では「異常」であることによってもたらされる孤独、つまり社会的な「他者」認識がとりわけ目立つ。たとえば、三島自身が『仮面の告白』に関連して言及した森鴎外の『キタ・セクスアリス』（1909 年）では、主人公・金井湛が「自分の性欲的生活が normal（注・正常）だか anomalous（注・異常）だか」（『鴎外全集』岩波書店、1972 年、90 頁）を判明するために、彼は「性欲の歴史」（同上）を書く。しかし、『仮面の告白』の「私」が、生まれてから現在までの人生を振り返りながら自分を「異常」と判断していくのに対して、金井は、「僕

には Urning（注・同性愛）たる素質はない」（111 頁）と明示し、最終的に「自分は無能力では無い。Impotent（注・性的不能）では無い。世間の人は性欲の虎を放し飼にして、どうかすると、その背に騎って、滅亡の谷に落ちる。自分は性欲の虎を馴らして抑えている」（178 頁）と結論付けることで、「anomalous」を否定する。[29] 金井は結果的に自分の性欲を「正常」なところへ位置付けており、「異常」であることを認めた『仮面の告白』の「私」が経験するような、他者とのつながりの不在から来る孤独は見られない。

同じく、谷崎潤一郎の『饒太郎』（1914 年）においても、主人公・饒太郎が告白しているマゾヒズムは、「異常」ではあるものの、彼を社会的な「他者」として位置付けているとまでは言えない。この小説は、『仮面の告白』のように性科学の言説を作中に取り入れて、主人公の性欲を解説しつつ、主人公にマゾヒストというアイデンティティを与える。饒太郎は、ドイツの性科学者・クラフト＝エビングの著書を読んで、自分と同じ快楽を求める人が世界中に「何千何萬人も居る」（『谷崎潤一郎全集』第 2 巻、中央公論社、1966 年、405 頁）ということや、西洋にはこのような「性癖」を持つ者の「かゝる注文に応じるやうな Prostitute（注・娼婦）」（406 頁）が存在することを知り、自分が現代の日本で生まれたことを悲しく思う。なぜなら、現代の日本にはそのような「娼婦」がいないからだ。それ以降、饒太郎は、自分の「性癖」に応じてくれる女性を求め、何人かと交渉し、性的な満足を得る。その過程で「性癖」も明かす。つまり饒太郎は、『仮面の告白』の「私」のように自分が他人と異なるという認識からなる孤独と挫折ゆえに「正常」な方向へ自分を変えたいと願うほど苦しむ様子は見せていないのである。[30]

このように『仮面の告白』は、同年輩の少年・青年たちとのつながりの不在を描写することで、主人公の内面の葛藤と孤独や不安を表現できたのだが、その時に三島が「私」に与えたキャラクターの素質は、同性愛と性的不能の融合であった。性科学の知識として普及していた同性愛と性的不能の関わりを、小説に表したのは『仮面の告白』がほぼ初めてである。さらに、『仮面の告白』以降、同性愛に性的不能を絡めた他の作品が発表され、中で

は大江健三郎『喝采』（『文学界』1958年9月号）の主人公・夏男のような例も見られる。大江は、『喝采』が収録された単行本『見るまえに跳べ』（新潮社、1958年）の「後記」で、「強者としての外国人と、多かれ少なかれ屈辱的な立場にある日本人、それにその中間者としての存在（外国人相手の娼婦や通訳など）、この三者の相関をえがくことが、すべての作品においてくりかえされた主題[31)]」だと書いている。大江が主張するとおり、『喝采』におけるフランス人のリュシアンと日本人の夏男の同性愛は、「やしなわれて一緒に寝てるんだ」（『大江健三郎全小説』第1巻、講談社、2018年、401頁）と表現されるように従属関係にある。[32)]

ところが、この小説では女性を肉体的に愛することができないと信じていた夏男が、娼婦の康子によって「三年も前からの痼疾から回復」（410頁）する場面がある。それによって自分は「男らしいことのできる人間だ」（同上）と思うようになった夏男だが、康子が実は「男たちの愛を傍からたすけたり、疲れた片方のかわりに楽しませたり」、「不能と寝たってちゃんときまりをつける」（416頁）娼婦であることを知ってからは、他の娼婦と肉体的な関係を試みても失敗に終わり、再びリュシアンに抱かれる。夏男が康子と性関係を結ぶことで、一時的とは言え、男性性を回復する場面から考えると、彼の「不能」は機能的な問題と言うより、心理的なもののように思われるが、ここで焦点を当てたいのは、「男たちの愛」と「不能」が同一視されている点である。こういう同性愛と性的不能の錯綜は、これまで見てきたような時代の知と、『仮面の告白』のような先行する作品があったからこそ小説に書かれるようになったのではないか。女性に恋し、女性に性的に反応する男性のみを「正常」と思っていた時代であるために、男性に恋する男性・女性には性的に興奮しない男性が、同じ枠の中に組まれたのであろう。そして『仮面の告白』はそのような時代の知を小説に援用した先駆的な作品であると言えよう。

おわりに

本稿では、三島由紀夫の小説『仮面の告白』の「私」が、同性愛者かつ性的不能者であることに着目し、その人物像について考察した。自己の性的指向を「生まれつき」の「宿命」と認め、自身を性的・社会的な「他者」として位置付ける「私」のキャラクター性は、三島が『仮面の告白』の執筆の際に読んだであろうスタンダールの小説『アルマンス』のオクターヴと似通っている。性的不能とされるオクターヴの「宿命」的な秘密が、同性愛とも解釈できる面を有していると論じる先行研究を取り上げつつ、オクターヴが持っている「他者性」に注目することで、三島はなぜオクターヴの性的不能に関心を示したのか検討した。三島はオクターヴが経験するような性的不能にまつわる苦しみを同性愛者の「私」に引き継いだのだが、その背景には『アルマンス』と『仮面の告白』が書かれたそれぞれの時代における性の知との類似がうかがえる。

同性愛者である「私」の性的不能は、日本の近代文学史にあっては稀なものであり、その素材の強烈さゆえに、後代の作品への影響も垣間見られる。本稿では取り上げられなかったが、小池真理子の『欲望』（新潮社、1997年）では、三島由紀夫の小説を愛読する性的不能の青年・秋葉正巳が登場する。性的不能という「欠如を宿命として負わされた」（336頁）正巳は、他の登場人物たちの同性愛を疑ったり、『仮面の告白』の主人公が聖セバスチャンの絵を見て射精するシーンを見て感じたと話す青田類子に対して「僕もさ」（389頁）と答えたりする。作中、正巳が同性愛者として描かれている訳ではないものの、三島の小説を会話の材料にしている中で、性的不能の人物が聖セバスチャンの場面にうなずくという仕組みは、やはり『仮面の告白』が見せた同性愛と性的不能の交錯の印象深さを感じさせる。『喝采』や『欲望』を含め、『仮面の告白』に後続して同性愛と性的不能を題材にした作品群の比較検討を今後の課題としたい。

［注］

1）　三島由紀夫「作者の言葉」『決定版三島由紀夫全集』第27巻、新潮社、176頁（初出は『近代文学』1949年4月号）。
2）　中村佑衣「三島由紀夫『仮面の告白』論―＜告白＞と二つの主体」『聖心女子大学大学院論集』第38巻第2号、聖心女子大学、2016年、12～13頁。
3）　三島が参考にしている性科学の知見に関しては、朴秀浄「三島由紀夫における同性愛言説の受容―『仮面の告白』と『禁色』とを中心に―」（『比較文学』第61号、日本比較文学会、2019年3月、60～75頁）を参照されたい。
4）　松原雅典は、オクターヴの性的不能の解釈をめぐる先行研究では「病理的解釈、歴史的・社会的解釈、「ためらいと誤解のドラマ」とする解釈、病気の本質をルネのようなロマン主義的ヒーローのメランコリーとする解釈」などが行われてきたとまとめている（松原雅典『スタンダールの小説世界』みすず書房、1999年、80頁）。
5）　Stendhal & Prosper Mérimée, *Correspondance inédite / Stendhal; précédée d'une introduction par Prosper Mérimée*, Paris: Calmann-Lévy, Vol. 2, [n.d], p. 56.
6）　男性の性的不能を示す言葉として17～18世紀のローマ・ナポリ・ジェノヴァなど、イタリアでよく使われた。性的不能が理由で離婚したバビラノ・パラヴィッチーニ（Babilano Pallavicino）の名に由来する（https://www.cnrtl.fr/definition/babilan、最終閲覧日：2020年9月4日）。
7）　デュラス侯爵夫人は、1824年から25年にかけて不可能な結婚を描いた『ウーリカ』『エドゥアール』『オリヴィエ』を書いた。この中で性的不能の青年の恋愛と孤独を描いた『オリヴィエ』は、当時、サロンで朗読されて人気を集めた。その後、アンリ・ド・ラトゥシュは、同じく性的不能者を主人公とする別の『オリヴィエ』を書き、1826年1月に無署名で公刊した。そしてスタンダールは、1826年2月号の『ニュー・マンスリー・マガジン』誌にラトゥシュ作『オリヴィエ』の書評を発表した。以上の二つの『オリヴィエ』とスタンダールの書評については、高木信宏「『アルマンス』における主人公像の造型」（『Stella』第17号、九州大学フランス語フランス文学研究会、113～115頁）を参照して簡略にまとめた。
8）　Talbot J. Emilie, “The Impossible Ethic: A Reading of Stendhal's *Armance*”, *French Forum*, Vol.3, No.2, 1978, pp. 147–148.
9）　アンドレ・ジード「『アルマンス』序文」『ジイド全集』第8巻、建設社、1934年、227頁。
10）　同上、229頁。
11）　エミリー・タルボットが指摘しているように、スタンダールがあまりにも克明に明かしたオクターヴの性的不能は、『アルマンス』への「純粋」な接近を困難にさせ、

ジードも結果としてオクターヴの秘密を色眼鏡で見てしまったのである（Talbot, Ibid, p. 148）。

12） ジード前掲書、231～232頁。

13） 三島「「アルマンス」について」前掲全集第30巻、287頁（初出は『世界文学大系21 スタンダール』1月報、筑摩書房、1958年）。

14） 同上、288頁。

15） 同上、289頁。

16） 三島「作者の言葉」前掲全集第27巻、176頁。

17） 栗須公正「三島由紀夫とスタンダール」『アカデミア―文学・語学編』第77号、南山大学、2005年。

18） 同上、11～13頁。

19） 大岡昇平「『アルマンス』の問題」『大岡昇平全集』第20巻、筑摩書房、1996年、633頁。

20） フランスの作家、ジャン・ローランによる『フォカス氏』（1901年）では、女性に対して性的に興奮しないフレヌーズという人物が、ルーヴル美術館にてアンティノウスの胸像を見た瞬間、「緑の光」と表現されるオーガズムを感じる場面がある。『フォカス氏』は、篠田知和基訳で妖精文庫から1981年に出されたため、『仮面の告白』創作時の三島がこの小説に目を通した可能性は低い。しかし、女性に向けては性的不能の主人公が、聖セバスチャンの如き、ローマ時代の同性愛のシンボルであるアンティノウスに性的快感を覚えるという類似は、非常に興味深く、性的不能と同性愛の結びつきを考える際に、参考になる作品の一つであると考えている。

21） Dominique Fernandez, “ Le Secret d’Octave”, *Armance*, Paris: P.O.L, 1992, p. 15. フェルナンデスの研究以外に、オクターヴを同性愛者と見なしている論考には Paul Morand (“Armance ne rime peut-être pas avec ... impuissance?”, *L’Eau sous les ponts*, Paris: Grasser, 1954)、Jean-Paul Aron & Roger Kempf (“Triumphs and Tribulations of the Homosexual Discourse”, *Homosexualities and French Literature: Cultural Contexts/Critical Texts*, edited by George Stambolian & Elaine Marks, Ithaca: Cornell University Press, 1979) などが挙げられる。

22） Fernandez, Ibid, pp. 15–16.

23） Ibid, pp. 9–11.

24） アンガス・マクラレン（著）、山本規雄（訳）『性的不能の文化史―“男らしさ”を求めた男たちの悲喜劇』作品社、2016年、238頁。

25） 同上。

26） Andrew J. Counter, *The Amorous Restoration: Love, Sex, and Politics in Early Nineteenth-Century France*, Oxford: Oxford University Press, 2016, pp. 169–171.

27） 田中香涯「陰萎」『変態心理』1923年4月号、日本精神医学会、169頁。
28） 羽太鋭治・澤田順次郎共著『変態性欲論』春陽堂、1915年、694頁。
29） 黒岩祐市「「男色」と「Urningたる素質」―『キタ・セクスアリス』の男性同性愛表象」『言語社会』第3巻、一橋大学大学院言語社会研究科、2009年、310頁。
30） 鈴木登美はが指摘するように、饒太郎が自分を「マゾヒストだと自称するとき、主人公は密かに自分自身を別格視し、西洋の偉大な文学者たちの仲間入りをする特権をみずからに与えている」（『語られた自己―日本近代の私小説言説』岩波書店、2000年 、218頁）ため、饒太郎の「異常」は、「私」のような性的・社会的な「他者」認識とは異なるものである。
31） 大江健三郎『見るまえに跳べ』新潮社、1958年、251頁。
32） 黒岩祐市は「大江作品では外国人男性と日本人男性の支配／従属関係を鮮烈に表すものとして男性同性愛が持ち出される」（「大江健三郎『喝采』の男性同性愛表象」『フェリス女学院大学文学部紀要』第47号、フェリス女学院大学、2012年、159頁）と述べている。また、デヴリム・C・ギュヴェンは、1950年代後半の政治的な状況を考慮した上で、夏男の同性愛の背後に潜んでいる「政治的な離脱」を指摘している（「大江健三郎の最初期小説における「政治的な参加」の問題―「喝采」を中心に―」『言語情報科学』第9号、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、2011年、190頁）。

［付記］

本稿は第22回国際比較文学会（於マカオ大学、2019年7月30日）における口頭発表“Reception of Stendhal in Mishima Yukio: Focusing on the Sexuality Issue”に大幅な加筆修正を加えたものである。発表に際して本学の橋本順光教授、Lambrecht Nicholas Mahood助教から貴重なご教示・ご意見を賜った。この場を借りて感謝申し上げる。

（文学研究科招へい研究員）

SUMMARY

A Comparative Study of *Confessions of a Mask* and *Armance*: The Complication of Sexual Impotence and Homosexuality

Soojung Park

Mishima Yukio (1945–1970) is known to frequently refer to foreign literary works and materials from various languages when writing his novels. For example, *Confessions of a Mask* (1949), which brought him a great reputation as an author, made reference to the homosexuality discourse found in 19th-century Western sexology. While many motifs are thought to be reflected in the image of the gay protagonist "I," this paper focuses on the influence of *Armance* (1827), which was written by the French author Stendhal (1783–1842).

Confessions of a Mask is particularly interesting because the main character, "I," is gay and sexually impotent. Meanwhile Octave in *Armance* carries a fateful secret, which, according to Stendhal, is impotence. Mishima mentioned sexual impotence as a serious motif of *Armance*, so I infer that the theme of sexual impotence in *Armance* influenced *Confessions of a Mask*. Recent discussions have produced the opinion that Octave's secret is homosexuality and not impotence. Referring to these preceding studies, I argue that impotence and homosexuality are intertwined within the concept of Otherness. If we examine the similar discourse on homosexuality and impotence in 19th-century Europe, where *Armance* was written, and in mid-20th-century Japan, where *Confessions of a Mask* was published, we can understand the social and historical context of "I" and Octave. Through this analysis, I will clarify why Mishima gave his gay character the trait of impotence.

Keywords: Mishima Yukio, Stendhal, Sexual Impotence, Homosexuality, Sexology